

縄文の

		B.C.13,000	B.C.9,000	B.C.5,000	B.C.3,000	B.C.2,000	B.C.1,000	B.C.300	A.D.300	A.D.600	A.D.800	A.D.1,200	
日本	旧石器時代	縄文時代						弥生時代	古墳時代	飛鳥時代	平安時代	鎌倉時代	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期						
北海道	旧石器時代	縄文時代						続縄文文化		擦文文化		アイヌ文化	
		草創期	早期	前期	中期	後期	晩期		オホーツク文化	トドイ文化			

縄文の大地

北海道を中心に暮らしてきたアイヌの人びと。かれらは縄文人の特徴を強く受け継ぐ。あとでご紹介するように、その文化には縄文伝統の精神文化もうかがわれる。アイヌ語も、縄文語の伝統を色濃くとどめている可能性がある。アイヌは縄文伝統の民であり、私たちが暮らす北海道は、いわば「縄文の大地」といえる。

では、北海道はなぜ縄文の大地であり続けたのだろうか。

日本列島で一万年を越えて展開した縄文文化は、およそ3000年まえに農耕文化である弥生文化に転換した。北海道はこの新たな文化に組み込まれることなく、続縄文文化（弥生・古墳時代並行）、擦文文化（奈良・平安時代並行）、アイヌ文化（鎌倉時代～）と独自の文化が続いた。つまり、この弥生文化の成立こそ、北海道が本州とは異なる道を歩むことになった分岐点なのだ。

農耕の拒否

では、北海道の人びとはなぜ弥生農耕文化を受け入れなかったのだろうか。

北海道は寒冷で農耕ができなかったからだ、と考える研究者もいる。品種改良も進んでいない弥生時代のことだ。熱帯起源の水稻耕作を北海道でおこなうのは、たしかに容易ではなかつただろう。

しかし、九州北部で成立した弥生文化は本州北端まで拡大し、青森でも当時の水田跡がみつまっている。津軽海峡をはさんだ対岸の渡島半島南端であれば、水稻耕作は可能だったのではないかと考えてみたくなる。

そもそも弥生文化は、水稻耕作が困難な地域では雑穀栽培をおこなう「農耕文化複合」だった。北海道でも雑穀主体の農耕文化に転換すること、つまり弥生文化への転換が困難だったわけではない。

しかし最近の研究によれば、縄文時代に細々とおこなわれていた豆などの農耕も、続縄文時代（本州の弥生・古墳時代並行期）になるとまったく確認できなくなるという。弥生時代を迎えた北海道の人びとは、まるで農耕そのものを「拒否」したようにみえる。



そのことを裏付けるように、続縄文時代になるとヒグマ猟や外洋や深海の大型魚の漁など専門的な狩猟漁撈活動が活発化した。

交易する狩猟民

なぜ弥生農耕文化が受け入れられなかったのか——この疑問について考える手がかりは、近世のアイヌの暮らしにある。

アイヌの住居には、本州の甲冑、刀、漆器などの宝物が飾られていた。かれらはこれらの宝物を、本州で武具や馬具などに用いる陸海獣の毛皮、最上級の矢羽であるオオワシの尾羽、干したナマコ・アワビ・サケ、海獣類などさまざまな「動物」と交換して手に入れていた。

つまり、アイヌは農耕に頼ることなく、というより狩猟漁撈に特化することで、本州の庶民とは比較にならない豊かな暮らしを実現していた。かれらは交易狩猟民と呼ぶべき人びとだったのだ。

このような暮らしを可能にしていたのは北海道の特異な自然環境だ。津軽海峡に横たわるブラキストン線を境に、ヒグマやエゾシカなど哺乳類にはちがいがみられる。トドやアザラシなど北方の海獣類が北海道の沿岸を回遊し、川には大量のサケが遡上する。

交易の資源は無尽蔵にあり、寒冷地の北海道で産する毛皮はきわめて上質だ。本州の自然環境との差異が、アイヌを狩猟交易民たらしめていたのだ。

日本列島の北東アジア的世界

本州で学生時代を過ごした私は、常緑広葉樹が生い

大地を生きる

瀬川 拓郎 (せがわ たくろう)

札幌大学教授
前旭川市博物館館長

札幌市生まれ。博士（文学・総合研究大学院大学）。専門は考古学。主な著書に『アイヌ学入門』（講談社現代新書2015年第3回古代歴史文化賞大賞）、『アイヌと縄文もうひとつの日本の歴史』（ちくま新書）、『縄文の思想』（講談社現代新書）などがある。2018年4月から現職。

茂る風景になじむことができなかった。一方、調査で訪れたサハリンの景観には、まったく違和感を感じる事がなかった。自然環境からみた北海道は、本州の南方的世界と対峙する北方的世界、日本列島に張り出した北東アジアの世界といえる。

擦文時代以降、アイヌはサハリン、大陸、カムチャッカなどへ次々進出していった。その事実も、北海道が日本列島の枠内にとどまるものではなく、北東アジアに開かれた地域であったことを物語る。

人骨に残るコラーゲンから縄文人の食生態を分析した米田穰によれば、北海道の縄文人は、もっぱら木の実などの植物や川魚などを食していた本州の縄文人とは異なり、海獣などの肉食が中心であった。北海道の縄文人骨に虫歯がきわめて少ないのは、肉食主体のせいだ。

北海道では縄文時代から、特異な自然のなかで本州とは異なる暮らしが展開してきたのであり、この肉食・魚食も北東アジアの人びとと共通する食生態なのだ。

弥生文化の宝と毛皮

しかし、弥生文化を受け入れなかった北海道の人びとも、弥生文化と無縁でいることはできなかった。

たとえば弥生時代になると、本州では西日本を中心に鉄製品・管玉・南島産貝製品といった新たな産物が流通するようになり、上層の人びとの暮らしを彩った。北海道の続縄文時代の遺跡でも、これらの産物が出土するようになるのだ。

では、続縄文時代の人びとは、どのようにしてこの

宝物を手に入れたのだろうか。

古代の本州では、北海道の毛皮が珍重されていた。『日本書紀』には、王権が所蔵するヒグマの毛皮の記事がみえる。『源氏物語』や『うつほ物語』など平安時代の文学や日記にも、貴族が愛用していたクロテンの毛皮のオーバーが登場する。北海道の毛皮は、権威や富の象徴として不可欠な宝となっていた。

本州の王族は、弥生文化の中心であった西日本にあらわれたが、この王族たちも、権威の象徴として北海道の毛皮に目をつけたのではないか。しかし、2000年以上もまえの弥生時代に、北海道と西日本のあいだで交流があったのか、と疑問におもわれるかもしれない。

西日本の王族と北海道

ところが弥生時代になると、西日本と北海道のあいだでは活発な交流がみられるようになる。

たとえば、伊達市有珠モシリ遺跡など続縄文時代の遺跡で出土している南島産貝製品は、福岡など九州北部からもたらされたものだ。礼文島の浜中2遺跡では、長崎の壱岐島あたりからこの地へ訪れた人びとの足跡も確認されている。

さらに、西日本を中心に分布する呪術具の卜骨が、余市町フゴッペ洞窟とせたな町貝取潤2遺跡で出土しているほか、北海道の人びとの漁法には、九州・山陰など西日本の影響がうかがえるようになる。西日本の弥生人との交流は、たんなるモノの交換にとどまらず、さまざまな文化の交流にまでおよんでいたのだ。

では、西日本の弥生人は、いったいなにを求めて遠い北海道へやってきたのだろうか。困難な航海をものともせず、手に入れたかった北海道の産物——それはやはり王族が身にまとう毛皮がふさわしいだろう。

もし北海道の縄文人が弥生文化に転換し、寒冷地で雑穀栽培をおこなう零細な農耕民になったとすれば、これらの宝物を手に入れることは到底できなかったはずだ。弥生時代を迎えた北海道の人びとは、二流の農耕民ではなく、近世のアイヌがそうだったように、交易する狩猟民として生きることを選択したのではないか。

縄文の精神世界を生きる

弥生文化を拒否したといっても、北海道の人びとが



縄文時代の暮らしにとどまったわけではない。かれらは本州や北方世界の産物と文化をとりこみ、時代とともに変化してきた。実際、住居や道具といった物質文化だけみれば、近世のアイヌに縄文文化の伝統をみいだすのはきわめてむずかしい。

しかし、モノではなく精神文化に注目すれば、アイヌは縄文文化の伝統を脈々と受け継いできたといえそう。具体的な事例からみていくことにしたい。

仔グマを入手し、一定期間飼養して殺すクマ祭りは、近世のアイヌにとってもっとも重要な一種の動物供犠の祭りであるが、これがどの時代に成立したのか明らかになっていない。

一方、縄文時代の北海道では、本州から生きてまま入手した仔イノシシを一定期間飼養して殺す、クマ祭りと酷似する祭りが各地で活発におこなわれていた。このイノシシ祭りは、沖縄から北海道まで縄文時代の日本列島の全域でみられる、縄文人の精神文化の核であり、いわば縄文イデオロギーだ。弥生時代になると、本州では縄文イデオロギーとしてのイノシシ祭りは途絶した。

縄文時代のイノシシ祭りとアイヌのクマ祭りは、飼養動物の供犠というモチーフが一致する。両者には関係があると考えるのが自然だろう。

贈物という思想

アイヌには送りの思想がみられる。これは、動物だけでなく植物や器物などあらゆるものが神の化身であり、その化身という贈物を受け取った人間は、化身から解き放たれた神を感謝とともに天上の世界へ送る、というものだ。

骨や皮、燃やした木の灰、壊れた器物といった残滓は、ただのゴミではなく神の化身の一部であり、特定の場所でねんごろに処置されなければならない。

一方、縄文時代には全国各地で貝塚が残され、そこには人間や愛犬の遺体も埋葬された。そこで、貝塚はたんなるゴミ捨て場ではなく、アイヌの送りと共通する思想にもとづくものと考えられてきた。本州では弥生時代以降、貝塚はみられなくなるが、送りの儀礼は今なおアイヌの人びとによっておこなわれている。かれらの送りの思想が縄文時代までさかのぼるのは明

らかだ。

世界遺産候補である北海道の縄文遺跡群には、洞爺湖町入江・高砂貝塚、伊達市北黄金貝塚がある。入江・高砂貝塚は3000年以上、北黄金貝塚も1500年以上という長い時間をかけて残された貝塚だ。これは縄文時代における長期の定住を物語るものであり、その定住は周辺の資源をまんべんなく利用する当時の生活のありかたによって達成された。

縄文時代以降、北海道でもこれほど巨大な貝塚は知られていないが、それは送りの思想の衰退を意味するのだろうか。そうではなく、続縄文時代以降、人びとが交易品となる特定資源の狩猟や漁撈に特化していったため、環境変化による資源の減少や枯渇が生じやすくなり、長期の定住が困難になったことを示しているのだとおもわれる。

北海道を生きる

北海道の縄文遺跡群を構成するのはほかにも、巨大な^{たてあな}竪穴を共同墓地とする千歳市キウス周堤墓群、長期間にわたる^{さいし}祭祀場跡の盛土遺構が残る函館市大船遺跡・同垣ノ島遺跡がある。

いずれも巨大な土木遺産として注目されているが、これらに共通するのは精神世界にまつわる遺産であることだ。縄文時代の人びとにとって重要なのは、日々多くの時間と労力を割いて、みずからの心をかたちにすることだったのである。それは、神への感謝の儀礼を生活の核に据えてきたアイヌの人びとも同じだ。北海道の風土は、この地で生きる人びとの心を規定してきたのだ。

では、北海道に暮らす私たちは、縄文の大地という風土を生きているだろうか。この大地がはぐくんできた歴史と自然の固有性に寄り添って生きているだろうか。たしかに私たちは北海道「に」生きている。しかし北海道「を」生きようとしているだろうか。

北海道の大地には、先人たちの心の水脈が^{たた}湛えられている。人はその水で口を潤すことなく、この地で生きてはいけないはずだ。縄文遺跡群の世界遺産登録に向けた動きをきっかけに、北海道の現在と未来を、縄文の大地というまなざしから考えてみたい。